宮下愛梨(3年生)　ダンス・プロデュース研究部(五反田/松沢病院)

7月24日、8月20日ダンス・プロデュース研究部のイベントの一つとして「五反田リハビリテーション病院訪問showing」「松沢病院ロビーコンサート」に参加し演目を披露しました。松沢病院ロビーコンサートにはソングリーディング部にも賛助出演して頂きました。

演目内容はクラシックバレエやジャズモダンダンスやK-POPなど多種多様に行いました。たった30分の演技時間だったのにもかかわらず涙を流してくれる患者さんや、すごい拍手を送ってくれた患者さんがいました。しかし、看護師さんから「いつもはムスッとしている方なのよ」と教えて頂きました。そして、患者さんだけにとどまらず仕事の休憩中に見に来てくださった看護師さんも、涙を流してくださいました。舞台で踊っていることが多いのでこういった観客と演者が近い環境で踊るといつもより一層、観客の表情などがわかり貴重な体験になります。普段は自分が表現したいものを作品にすることが多いのですが、環境やニーズを考えて作品を創るいい勉強になりました。舞台で演技するのは勿論、今後もこの様な活動をどんどんしていけるようにしたいと思います。

NEWS

【3年生パフォーマンス】
2018.11.4(日)@本学　総合体育館多目的ホール

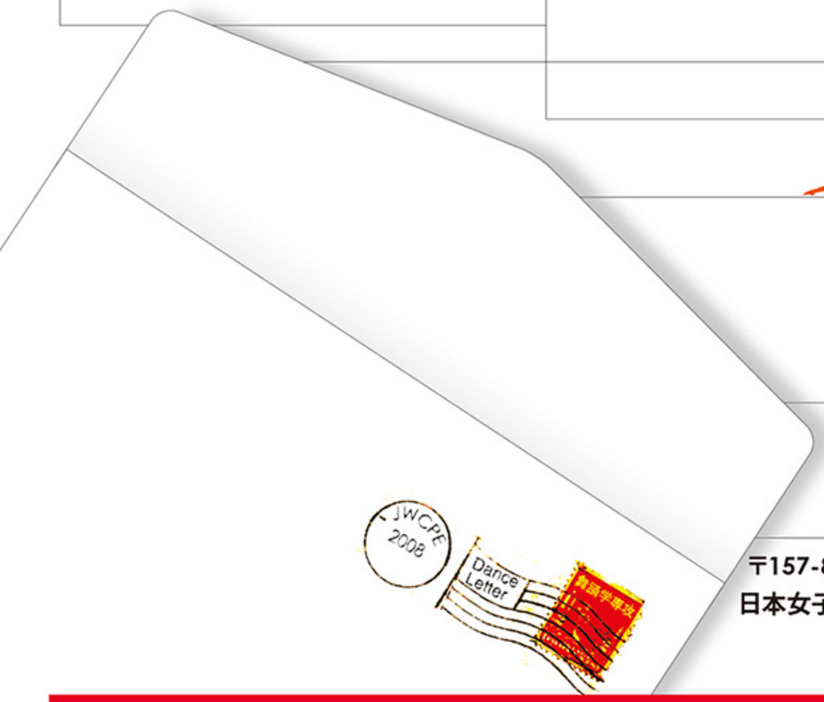
【第71回全国中学校・高等学校ダンスコンクール】
2018.11.23(金・祝)@メルパルクホールTOKYO

【第17回舞踊学専攻卒業公演】
2019.1.22(火)@府中の森芸術劇場　どりーむホール

編集後記

いつも最後までご覧いただきありがとうございます。学校生活は後期が始まっており、ますます学校活動が盛んになっています。
ダンスレターがより多くの方に見ていただけるよう、力を入れて作成・編集していきたいと思います。これからもダンスレターを宜しくお願い致します。

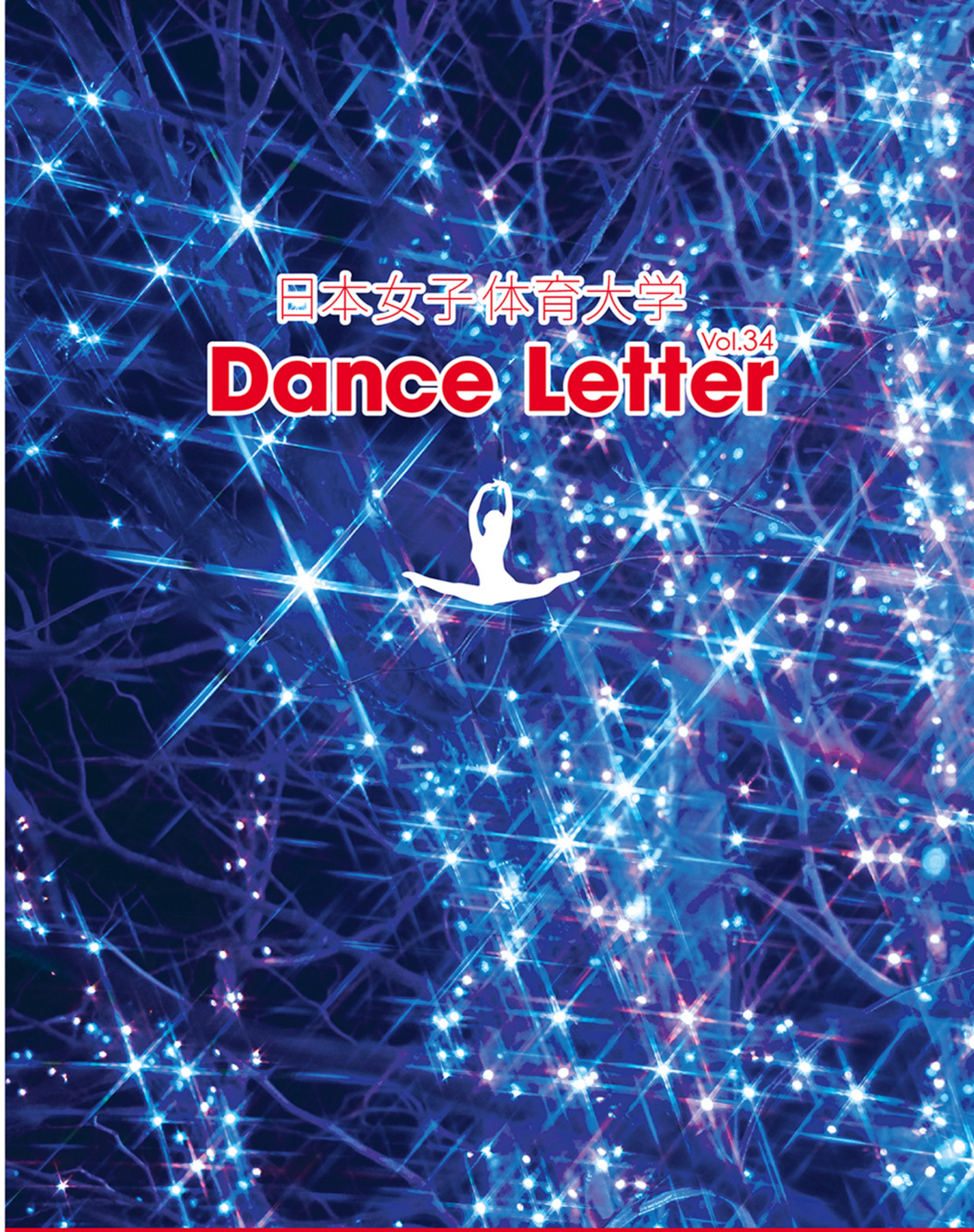
小松百合子・竹田奈央(3年生)



発行
〒157-8565　東京都世田谷区北烏山8-19-1
日本女子体育大学　運動科学科　舞踊学専攻

発行日:2018年11月23日(金)

http://www.jwcpe.ac.jp/



http://www.jwcpe.ac.jp/

Dance Letter Vol.34

SHOWCASE2018夏　1年生

荒木美結(1年生)　SHOWCASE(A1クラス)

この大学に入学して初めての公演であった「SHOWCASE 2018 夏」は私達にとって、とても濃い経験となりました。初めて出会った同級生や先輩方と作品をつくることが私にとってはとても緊張することで、はじめはよくわからずに右往左往することが多々ありました。しかし先輩方が丁寧に教えてくださり、同級生からも指摘やアドバイスをもらうことでなんとか振りについていくことができました。時には1年生同士で意見の食い違いが起こることもありましたが、最終的には全員で気持ちを揃えて公演に挑むことができました。しかし、トップバッターということもあったせいかゲネは不完全燃焼で終わってしまいました。そのため、本番前に全員で気持ちを入れ替え、先輩方にも激励をいただき、本番は全員が完全燃焼で踊りきることができました。本番直後は踊りきったという達成感や、SHOWCASEが終わってしまったという喪失感などで心がいっぱいになりました。

SHOWCASEという大きなイベントを経験して、私達は大人数で作品を創り上げていく大変さや、素晴らしさを大いに感じることができました。この経験を活かして、これからの学生生活をひとりひとり大切にし、全力で取り組んでいけたらいいと思っています。

大津みなも(1年生)　SHOWCASE(A2クラス)

私は日本女子体育大学に入学した日に初めてA2のみんなと出会いました。初めは、皆育ってきた環境が違い、経験してきた踊りのジャンルや年月、もちろん性格も違うメンバーが一つの作品を創るなんてできるのだろうかと思っていました。最初の頃はただ先輩から指示されたことを行い、自分の踊りに専念することで精一杯でした。しかし、練習が進み様々な課題にクラスみんなで取り組むうちに互いに声掛けが増え、思っていることを口にすることが多くなっていきました。そのことで自然とお互いを理解しあうことができ、クラスが一つになって、練習の質や作品全体のでき栄えも良くなっていきました。また、先輩方はどんなに疲れていても明るく振る舞い、練習では18人全員に目を向け、一人一人と向き合ってくれました。私たちは踊ることでしか先輩方に感謝の気持ちを伝えることができません。だからこそ私たちは、本番ではダンサーとしてお客さんに楽しんでいただくことはもちろんのこと、なにより今まで支えてくださった先輩方に感謝の気持ちを込めて一丸となって踊りました。そんな先輩方の作品に出られたこと、そしてこの18人で作り上げた舞台、全てが私の宝物です。ありがとうございました。

後藤玖里香(1年生)　SHOWCASE(A3クラス)

入学から約3ヶ月、ずっと憧れていたニチジョでの初めての舞台。いつも授業や練習で使う多目的ホールに満席のお客様。見慣れない機材や照明が緊張感を掻き立てました。
入学直後から始まったSHOWCASE練習。慣れない大学生活にクラスメイトともまだぎこちない雰囲気の中、先輩方の創ってくださった振り付けを追いかけるのにただただ必死でした。

ダンスのジャンルも経験もバラバラな18人で、どうしたら先輩方が想い描いていた作品像に近づけるのか、試行錯誤の毎日でした。その中でも、ひとつひとつの動きのニュアンスを揃えていく作業がとても新鮮で、それと同時に作品を創っていくことの大変さを改めて感じました。少しずつ違う向きを向いていた18人が、真っ直ぐに正面を向いた時「みんなで踊る」ことの醍醐味がわかった気がしました。SHOWCASE本番、先輩方の創ってくださった作品をクラス18人で踊り上げた時の達成感と感動は、とても言葉では言い表せません。

ニチジョでの生活のスタートとして、本当にかけがえのない経験ができました。この経験を糧に、憧れの先輩方に追いつけるようパワーアップしていきたいと思います。支えてくださった皆さま、本当にありがとうございました。

諏訪部声良(1年生)　SHOWCASE(B1クラス)

SHOWCASEは日女生として出演する初めての舞台で、舞踊学専攻の学生であることを改めて実感させられる機会となりました。またこれに参加したことで、ようやく日女生としての1歩を踏み出したように感じました。そして振り付けをしてくださる2人の先輩との出会いは、日女の先輩と初めて深く関わる機会となりました。練習が始まったのは入学してまだ間もない頃で、クラスメイトの顔と名前もうろ覚えでした。色々なことが初めてで戸惑うことも多く、前半は探り探りで練習の日々を過ごしたことを覚えています。しかし練習を通してクラスメイトや先輩方と関わることが増え、日を重ねるにつれ練習が楽しくなっていき、作品に対しても積極的に取り組めるようになりました。だからこそ作品を創ることの難しさを知り、時には先輩方と一緒に考え、悩むこともありました。多くの壁を乗り越え、迎えた本番はとても気持ちよく演技ができ、達成感がありました。終演後には先輩方が作品に関して、時には対立し、悩み、全力で創作してくださったことを知りました。尊敬出来る先輩方との出会いと多くのことを学んだこの3ヶ月間を糧に、今後のダンス人生を力強く歩んでいきたいです。

山上莉穂(3年生)　現代の舞踊論

8月20日～22日の3日間、折原美樹先生による集中講義「グラハムテクニック」の勉強をさせて頂きました。私はこのクラスを受講する前に、理論の先生から「折原美樹先生のクラスはとても分かりやすくて、舞踊に携わっている人は必ずといって良いほど受講するべきレッスンである」と勧めて頂きました。グラハムの歴史などは松澤先生の授業を通して学びましたが、実際実技としてテクニックやダンスを踊ったことはなく、私は幼い頃からクラシックバレエを習っているので、グラハムテクニックが今後自分自身のダンスにどのように活かせるのかがとても楽しみでした。まず折原先生はレッスンに入る前のウォーミングアップに、ヨガやピラティスなどを取り入れており、先生が仰っていた呼吸法や、正しい身体の使い方は私にとって非常に興味深いものでした。自分の身体を良く知ること、そして自分自身の持っているものをいかに上手く使うかによって、踊り方や見せ方が大きく変わってくると思いました。そして普段はなかなか踊ることのできないグラハムの踊りにも触れることができ、この3日間は私にとってあっという間で、グラハムテクニックを通してさらに踊りの幅が広がりました。折原先生、貴重なお時間本当にありがとうございました。またぜひお会いしたいです。

コンクール

鳥海夏椰子(4年生)　アーティスティック・ムーブメント・イン・トヤマ

今回私たちは4年生2名, 3年生1名のトリオでアーティスティック・ムーブメント・イン・トヤマに挑戦しました。今年私たちは受賞という形で結果を残すことはできませんでしたが、収穫は大きなものでした。同じ審査基準では評価するのが難しい、多種多様な作品ばかり。しかしそういった多彩なダンスが集い、認め合い、励まし合える空間があることは貴重なことです。どんな経験を持つ人であっても、舞台の上では平等です。テクニックだけではない、独創性、ユーモア、それぞれの形の並々ならぬ熱量を感じました。それは自分たちで悩みながら作品を創り上げていったからこそ分かり合えるものなのではないかと思います。舞踊に魅せられた大学生に対するこのコンクールの存在の大きさを感じました。ここで得た様々な刺激を今後の舞踊活動で活かしていきたいと思います。この機会を私たちにくださった皆様、応援してくださった全ての方々に心より感謝申し上げます。

木村素子(4年生)　コンバットシステム(全日本高校・大学ダンスフェスティバル 神戸)

8月上旬に第31回全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）がありました。私たちは日本女子体育大学の代表として約半年間、神戸大会に向けて練習をし、『未完ー22歳の抗いー』という作品を踊りました。社会の迷子である大人になりきれない22歳という大人の若さや強さだけでなく、不安や弱さも持ったありのままの自分たちを舞台で踊り切りました。3年生になるまで私たちは様々な作品を試行してきましたが、神戸大会ではメッセージ性のある作品づくりを目指し、誰も観たことのないような新しい何かを出したく受賞することを目標としてきました。しかし残念ながら結果に繋げることができず、日本女子体育大学の代表として舞台に立たせていただきましたが、申し訳ない気持ちで一杯でした。しかし、神戸まで駆けつけて観て下さった先生方や保護者の方々、先輩、後輩、また他校の方々に良いパフォーマンスであったといっていただき、また自分たち自身も精一杯踊り切ることができとても幸せでした。今回は神戸大会で受賞はできませんでしたが、私たちの経験を後輩たちに伝えていき、これから更に磨きのかかった日本女子体育大学舞踊学専攻の作品を神戸大会で披露できることを目指していけたらと思います。この夏私たちは最高の経験を味わうことができました。私たちダンサーだけでは大会の場で踊ることは決してできなかったと思います。沢山の支えてくださった方々に心より感謝申し上げます。

部活動サークル活動

山城友理恵(4年生)　モダンダンス部（中野コンペティション）

私達モダンダンス部は8月19日に開催された第20回なかの国際コンペティション創作部門で、「生命のダンス」を踊り、第2位、ならびに「なかの洋舞連盟賞」と「ビジュアル・プライス賞」を受賞することができました。また1年生作品ではシニア部門入賞5位を獲得しました。このコンクールに出場するのは初めてで、沢山の不安がある中、練習に取り組みました。学生だけのコンクールとは異なり、年齢制限なしの規模の大きな大会なので、一段と難しく、どのように部員をまとめていけば良いのかと悩むことも沢山ありました。しかし作品を創る過程で、学年関係なく後輩から沢山の意見を出してくれたことや、一生懸命に付いて来てくれる姿に、一丸となって前に進んでいることを実感しました。この過程があったからこそ、本番では20人が踊りきり、最後には心から笑っている部員の姿を見ることができて本当に胸がいっぱいになりました。ここまで共に歩んできてくれた部員、支えてくださった沢山の方々の力があり、この賞を受賞することができたと思います。

今後もこの気持ちを忘れず、さらに精進してまいりたいと思います。

酒井萌花(3年生)　ダンス・プロデュース研究部(ぴちぴちちゃぷちゃぷらんらんらん'18)

毎年、ダンス・プロデュース研究部では、コンテンポラリーダンスで活躍する中堅の振付家を3名招いてダンプロ部員に振付けていただき、舞台スタッフはプロの方、制作は私たちが行う「ぴちぴちちゃぷちゃぷらんらんらん」という自主公演を、東池袋にあるあうるすぽっとという本格的な劇場で毎年5月に行なっている。今年は飛んだり跳ねたり、大技を繰り出すような作品ではなく、ダンサー自身が自分の体を見つめ直すことに重点を置いた作品を公演した。私は昨年、スタッフとして参加したが、まさか今年制作の仕事をするとは思っていなかった。制作の仕事は、本番までの様々な段取り（チラシ、宣伝）や劇場入りしてからの準備、当日の対応、終演後の作業など、舞台に立っているだけでは分からない、舞台を創る上での大切なことをたくさん学ぶことができた。どうすれば進行を滞りなくスムーズに行えるか、そのためにはどのようなことが必要なのか、今まで体験してことのないことばかりでとても難しく、大変だった。しかし、ダンサーが舞台に立つことを一番近くでサポートすることができ、全てが終わった時の感動は、何にも変えられないものだった。周りの方にたくさんサポートしていただいてやっと務められた制作という立場は、とても重要なのにもかかわらず裏に徹する、縁の下の力持ちである。このような貴重な体験をできたことに感謝し、今後の自分の糧としていきたいと思う。

藤本舞・木村詠海(3年生)　SHOWCASE振付者(B1クラス)

SHOWCASE振付者としてB1クラスのもとへ初めて挨拶に行った時、緊張で胸が張り裂けそうでしたが、それと同時にみんなにやっと会えることが本当に嬉しく、2人でとてもワクワクしていたことを覚えています。B1みんなが、まだ慣れない環境に少し固くなって私たちの前に座っている姿を見て、自分たちが1年生だった時のことを思い出し、あの時からもう2年も経つのだと思うと感慨深いものがありました。1年生にとっては、このSHOWCASEが日女生として立つ初めての舞台であり、大学生活のスタートとなる場でもあります。そのため、本番だけではなく練習の時間や一緒に過ごしてきた日々の全てを含めて、とにかく素敵な思い出にしてあげたいと思い、何をしたら楽しんでもらえるか、どうすれば彼女たちの笑顔を引き出せるかなど、気づけばB1クラスみんなのことを常に考えていて、今思えばそれはとても幸せな時間だったなと思います。作品について悩み、不安になる時期は確かにありましたが、みんなが本番を思う存分楽しんで支え合いながら踊っている姿を見て、その時の想いが嘘のように吹き飛び、彼女たちの振付者ができて本当に本当に良かったと思いました。B1クラスの18人が出会い、その18人と私たちが出会い、この作品を一緒に創り上げられたことはまるで奇跡のようで、私たちは、本当に素敵な時間と経験を得られたのだと心から思いました。

最後に、SHOWCASEに携わって下さった全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。有難うございました。

小野塚彩芽・寺園まほろ(3年生)　SHOWCASE振付者(B2クラス)

夏のSHOWCASEは特別な舞台であると私達は考えています。入学してすぐ練習が始まり、約2ヶ月後には本番です。新しい環境での舞台はジャンルや作品の進め方などの違いから戸惑うことが多かったと思います。言葉が足りず1年生を不安にさせてしまうことも多々あり、改めて振付者という立場の難しさを痛感しました。

私達の作品には2つのこだわりがありました。一つは1年生がこれから頑張っていこうと思える作品を創ることであり、全員の見せ場を創るために全ジャンルをコンテンポラリーダンスに組み込むという新しい挑戦をしました。もう一つは世界観です。私たちの作品には和(侘び寂び)と金魚の二重のテーマがありました。引き込まれるような作品を創るために、和の振付を組み込んだり鐘の音や和柄の衣装にしたりするなど、演出面でもこだわりました。金魚をモチーフにしたのは人々を魅了する金魚の動きに惹かれたことと、1年生に様々なものに挑戦して欲しいとう願いから「狭い水槽を壊して広い世界へ」という意味を込めこのモチーフを選びました。10枚の企画書から7分の作品ができ上がり、最初は言葉を形にすることが大変でしたが最後は作品を説明する方が難しくなりました。振付者の手を離れていったこの作品はB2クラス16人にしか表現できないものとなり、涙が溢れてきました。B2クラスの振付ができたこと、皆に出会えたことを本当に嬉しく思います。

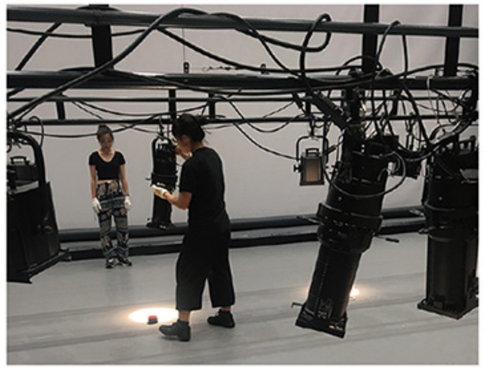
見城香椰子・宮下愛梨(3年生)　SHOWCASE振付者(B3クラス)

私達はB3クラスを担当し、作品を創作しました。私達のクラス作品は、抽象的なものの表現であり、一言で表すことの難しい作品だったので、1年生一人一人に作品を理解してもらい深めてもらうにあたって私達振付者も"表現"することの難しさを改めて実感しました。1年生はとても元気とガッツがあって、私達が提示したことに対し柔軟に動いてくれてリアクションを沢山くれたので私達も振付者として1年生のおかげで成長することに繋げられた部分も多くありました。1年生はかわいいかわいい妹のようで、SHOWCASE期間の3ヶ月という間で濃密な時間を過ごすことができて、なかなか会えない今は寂しいですが、1年生達が一つ一つ学年が上がるにあたってこの作品を"思い出"の一つとして頭の中に置いておいてくれれば私達は幸せです。

ワークショップ

竹田奈央(3年生)　勝部ちこさん・鹿島聖子さんのワークショップを受けて

私はコンタクト・インプロビゼーションを初めて経験したことで刺激を受け、多くの発見をし、新しい自分を知ることができました。初級WSの際に「重さをプレゼントする」という言葉が印象に残りました。今まではリラックスして力を抜き相手に頼るという意識を自分の中で重要視していたのですが、重さをプレゼントするという言葉は相手に頼るということではなく、自分から相手に寄り添い、自分自身を受け入れてもらうように働きかける行動だと思えるようになりました。中級WSの大勢で踊った際は、目の前の相手だけではなく広がった空間の中にいるみんなを感じて踊ったため、より集中力や瞬発力が必要になると感じました。多くの選択肢の中で、瞬時に選択し相手に寄り添ったり、一歩引いたりする思考力と判断力を活かしながら踊りました。コンタクト・インプロビゼーションは、相手との関係や相性などによって全く異なる動きになると思いました。しかし、どんな人ともかかわることができ、自分だけではできない動きが生まれるため、相手を受け入れ、相手も自分を受け入れるといったような、なくてはならない存在を認識し感じ取って動くことができる素敵な踊りだと思いました。



鹿山園実(3年生)　機材ワークシップを受けて

機材ワークショップは公演をするための舞台づくりを学ぶワークショップとなっています。外部の公演や舞台だとプロのスタッフではないと触れることができない照明卓の操作や照明のシュート、照明の色や形のアレンジを直接時間をかけて卒業生の宇野敦子さんから教えていただきます。私はこの機材ワークショップを受けて、実際に本番でダンサーを照らしたいと思い、本学の多目的ホールで行われるSHOWCASEと3年生パフォーマンスで照明スタッフを経験しました。機材ワークショップで照明や仕込みを経験すると、今まで当たり前のように立っていた舞台がこんなにもスタッフの手と時間がかかっていたことを知ることができます。ダンサーとして必要な舞台の知識や常識を身に付けることができ、振付を行う時の照明の工夫がやりやすくなるのでとっても役に立つステキなワークショップとなっています。また夏休みには集中講義でダンスカレントAという授業でも照明に触れることができます。今まで踊ることだけをしてきた私は裏方の仕事に触れたことで将来の選択肢の幅も広がったと感じています。照明の機材に触れていたり、ダンサーと一緒に色を決めたりすることがとても楽しいです。

安井志織(3年生)　イニャーキ・アズピラーガさんのワークショップを受けて

今回、イニャーキ・アズピラーガさんワークショップを受講させていただき、床を使ったテクニックやコンタクトワークの面白さを改めて実感しました。ワークショップは、まず2人組での簡単なコンタクトから始まりました。お互いが腕を引き合う力や反発する力を使って移動したり、相手と呼吸を合わせたり、相手に身を委ねるようにして動くこと、相手の力を把握するなどのコンタクトで必要となることを体感しました。次に、フロアの動きでは、床から手足を離さないように移動したり、床に転がり込んだりするテクニックを通して、床と接していることを強く意識し、床と身体を馴染ませていくことを感じていきました。後半では、最初に行った2人組でのコンタクトにリフトなどを加えた一連の動きを行いました。相手と接する際に、身体を脱力すればよいのか、軸を意識するべきなのか、また、相手をどのように導いていくのかなど、とても細かくインストラクションしていただきました。ワークショップを通して、自分の身体への意識のみでなく、床や相手などへの意識も強まったように思います。先生は、終始ジェスチャーを交えたとても丁寧で明瞭な説明や注意をしてくださり、どんどん挑戦していこうという向上心が高まりました。本当に楽しく、充実した時間でした。

このようなワークショップに参加できたことを心から嬉しく思います。

前期授業

新井聖菜(4年生)　スペイン舞踊2

3年次の後期から、さらにステップアップした内容のスペイン舞踊2でした。3年次には履修しておらず、今回初めて受講した仲間もいて、足のステップを授業の前に教え合うなどして授業に取り組みました。スペイン舞踊とは情熱があり、力強い踊りです。その特徴を表すためには、気持ちを強く持つだけでなく、その感情を踊りにのせることで初めてスペイン舞踊の奥深さが出るものだと痛感しました。スペイン舞踊は、女性らしさを表現する踊りでした。型がある舞踊のなかで女性らしさを表現することは非常に難しかったです。また、帽子を持って踊ったため、足のステップだけでなく、帽子の使い方にも意識を向ける必要があり、少しではありますが、3年次からの成長を感じました。他の舞踊にはないスペイン舞踊の魅力は、歌い手やギター奏者が主役になる部分と踊り手が主役になる部分があるところだと思います。また、常にその3つのポジションでコミュニケーションをとりながら1曲が進んでいくので、スペイン舞踊でしか味わえない楽しさがあります。踊り手の後ろに歌い手やギター奏者がいることから、踊り手は背中にも緊張感を自然と持つことになり、身体全体を使うことを実感しました。全身を使い、歌い手とギター奏者と同じ時間を共有しているときの気持ちの高まりは非常に気持ちよく、「オーレ」の掛け声がとても嬉しく、この踊りに出会えて良かったと感じました。この授業だけで終わってしまうのが悲しく、今後も触れていたいと思えました。陽子先生に出逢い、スペイン舞踊を教えていただけて、自分の踊りや感情の幅が広がったことに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

赤堀佑夏(2年)　野外上演法

今年は「ザ・グレイテストショーマン」をテーマに作品を創りました。私は学年の全体リーダーを務めさせて頂きました。初めて110人のダンサーに指示をするという貴重な体験をしました。あまり関わったことのない人と関わることができ、作品について話し合うなど、試行錯誤しました。始めは違うジャンル、様々な思考、違う環境で踊ってきたメンバーでひとつの作品を創るということは、簡単なことではありませんでした。みんなを相手にどう進行していけば良いのかわからず時間を無駄にしてしまい自分の要領の悪さに途方に暮れていました。どうしたらいいか悩んだ末に、客観的に全体を見て思ったことなど衝突を恐れずストレートに伝えるようにしました。

わたしはリーダーとして役目を果たせたのか、後悔が残ることがありますが、わたしはわたしらしいリーダーの在り方を全うしました。第一に学年のことを考えること、言葉の責任感、指示の仕方などリーダーとして様々なことを学びました。多くの友達、リーダー、先輩方や先生方に支えられ無事に終わることができました。2017Bのリーダーになれて幸せでした。

今年も天候に恵まれ、2017Bのみんなで作品を創り上げ、一人として欠けることなく踊りきれたことは本当にステキな学校生活の思い出になりました。

竹内愛(1年)　タップダンス

タップダンスの授業は金曜日の3限にありました。普通なら金曜日は1週間の疲れが出る曜日であり、お昼休み後の3限は眠たくなる時間でもあります。しかし、私はこの金曜日の3限を一番の楽しみにして、1週間を過ごしていました。なぜならタップダンスの授業がとても楽しくて面白かったからです。授業を受ける学生のほとんどがタップダンス初心者で私も少しだけ踊ったことがあるぐらいだったので、授業の初めはとても緊張感が漂っていました。「先生はどんな方なのかな」「授業についていけなかったらどうしよう」そんな不安ばかりが募っていました。しかしこの不安は一瞬で消えました。先生はとても優しくて面白くて、難しいステップでも簡単に覚えることができるユニークな教え方をして下さる先生だったからです。動きを覚えるのが大変で、何度先生の動きを見ても理解するのに時間がかかり大変でした。先生が「ステップを声に出して言ってみて!!」と仰ったので、その通りやってみました。すると今まで上手く鳴らなかったステップがちゃんと聞こえるように鳴り始めました。私はこのとき初めて、タップダンスを習得するための一番良い方法を知りました。自分で言葉に出してステップの数やアクセントを明確にすることで動きを理解でき、体が動くようになったからです。そしてただ音を鳴らすのではなく音色にすることが大事なのだと分かりました。タップダンスはダンサー自身が音を作り上げるダンスなので、それを意識して踊れるようになるにはまだまだ時間がかかりそうです。しかし、タップダンスはすごく面白いダンスなのだと知った今、「もっとタップを習いたい!!」と思っています。そんな思いになれるぐらいタップダンスの授業はとても楽しかったです。

集中講義

小野塚茉央(3年生)　ダンスカレントA

ダンスカレントAを受講した4日間で照明・音響による舞台や作品への効果について様々なことを学ぶことができました。その中で最も印象に残っているのは、最終日のショーイング本番で他チームの発表を見て音響や照明によって作品の見え方が大きく変わると感じたことです。いかに音響と照明が作品にとって重要で、大きな影響を及ぼすのかを実感する貴重な経験となりました。音響の講義では、舞台のスピーカーの位置によって音をずらして流すこと(左右のスピーカーでずらして音をかけると先に聞こえた方の音が聞こえるハース効果)や、圧縮音源についてなどの専門的な知識を学び、照明の講義では光の当てる場所や形で雰囲気が異なること、衣装や肌の色と光の色は複雑に作用し合うことを実際に照明を動かし目で見て学ぶことができました。最後に、講義をしてくださった照明の宇野敦子先生、音響の青木タクヘイ先生からは共通して「演者が主役であること」と「お客様」への意識が常にあることを感じ、これまでに立った舞台や観ていたものはこのようなお仕事の上に成り立ち引き上げていただいていたことを実感しました。この貴重な経験と学びを糧に感謝を忘れず今後の舞踊人生を歩んでいきたいと思います。

関口花梨(4年生)　ダンスカレントB

8月3日から4日間行われた集中講義のダンスカレントBでは、現在カナダのヨーク大学で講師をされているトムソン啓子先生にご指導頂きました。毎時間テクニックのクラスから始まり、午後は創作やインプロ、最後は教室で作品やテクニックについての映像鑑賞と1日1日とてもあっという間で中身の濃い4日間となりました。テクニックのクラスでは先生の専門であるリモンテクニックをご指導頂きました。バウンスやスウィングなど特徴的な動きに意識を向けていくと身体が繋がっていくような感覚を感じることができました。受講した4年生6人はインプロへの苦手意識を持っていましたが、色々なパターンのインプロやアプローチの仕方も様々で自然に楽しくなっていき、毎回フィードバックの時間があったことで新しい発見や次はこうしてみようとそれぞれが積極的に取り組むことができたと思います。この4日間を通してリモンテクニックを動きだけでなく知識としても学ぶことができ、インプロを通して課題を見つけることができました。このような機会を頂き1人1人丁寧にご指導くださいましたトムソン啓子先生に感謝しています。

尾上実梨(3年生)　舞踊学演習(テクニック＆レパートリー)

この講義では木佐貫邦子先生の振り付けを踊ることと、そしてインプロヴィゼーションの2つを主に進んでいきました。私はどちらかというと、与えられた振りをどう自分のものにして外に出していくかということを考え踊っていくことが好きで、今回木佐貫邦子先生から与えられた振りを、どんなニュアンスで踊るか、また、振付家が求めていることはなんなのかということをできるだけ明確に捉えられるように心がけました。要求されていることがはっきり分かったときや、できなかったときに、ではこれはどうかと試行錯誤をすることがとても楽しかったです。しかし、振り付けの中にも、振付家からイメージだけを伝えられ、自分で作るというインプロ的な要素が含まれる場合が多くあり、そういったときになにかを探し作り出していくことへの高揚感を感じつつ難しさも感じました。特に悩んでしまうのは、好きに踊って、といわれたときです。枠が無くなった瞬間に自分は不安定な状態になってしまうのだなと感じました。しかし、4日間インプロヴィゼーションを続けていくうちに複雑だったものが解けていくようにすっと動きのフレーズが出てくるようになりました。きっと自分に足りなかったものは素直さなのかもしれないとその時初めて感じました。年齢を増すごとに気持ちや考えがねじれて複雑になっていく中で、この集中講義を受講したことでやはり私はダンスが好きなのだと再確認しました。

これからもこのはっきりとした気持ちを大切に次に向かっていこうと強く思いました。

徳永朝恵(1年生)　SHOWCASE(B2クラス)

私たちB2は、初めてのSHOWCASEで和美魚溺(ワビサビ)を上演しました。練習が始まった頃は、まだクラス全員の名前も覚えきっておらず、一緒に踊る人はどんな人で、今までどのようなジャンルを踊ってきた人達なのか全く知らず、先輩方の振り付けについていけるのか、みんなで力を合わせることができるのか、不安で仕方ありませんでした。しかし、月日が経ち、実技の授業を通して今までやったことのないような動きにも少しずつ慣れていきました。SHOWCASEの練習も進む中で自分達にできることが増えていくのを実感することができ、毎日がとても面白かったです。初めは互いのことを全く知らなかったクラスメイトともいつの間にか打ち解けており、自主的に練習に取り組んだり、出来ないところを互いに教えあったりと次第に団結力が高まっていきました。もちろん、練習が進んでいく中で意見がぶつかったり、なかなか練習が思い通りにいかなかったりと、たくさん悩み挫けそうになることもありました。それでも諦めずにクラス全員で舞台に立ち、気持ちよく踊ることができたのは、先生方や先輩方のご指導、クラスの中での助け合いのお陰だと思っています。

先生方、先輩方、観に来てくださったすべての方々に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

古屋敷琴乃(1年生)　SHOWCASE(B3クラス)

B3クラスは「陰ヨウ画」をタイトルにSHOWCASEに挑みました。私たちの小さい頃の思い出をひとつの媒体として表現しました。練習はそれぞれの思い出を踊りにし、過去に自分が出会った事柄と向き合うことから始まりました。「思い出」という目に見えないものを表現するのはとても難しく悩んだこともありましたが、みんなで話し合い作品に対するイメージや捉え方を共有して、気持ちを揃えることができました。練習を重ねるうちにお互いの個性を認め、クラスとしてまとまるようになりました。B3の担当になった先輩方は私たちが悩んだり不安になったときも寄り添い、一緒に解決策を見つけてくださいました。このメンバーだからこそ完成した作品を、私たちはこれからも大切にしていきたいです。

SHOWCASEはたくさんの方の協力があったからこそ成功させることができました。指導してくださった先輩や先生方、運営をしてくださった方々のおかげで舞台に立てたことを忘れないようにしたいです。今回の経験を通して改めて舞台を創る大変さを感じました。このような環境で踊れることに感謝したいと思います。1年生にとって初舞台となったSHOWCASEを1つのステップとし、これからの学生生活に活かしていきます。

SHOWCASE2018夏　振付者

梶みなみ・久我明日加(3年生)　SHOWCASE振付者(A1クラス)

自分達の初舞台からあっという間に2年経ち、今度は自分達が1年生を振り付けする立場となりました。担当したA1は本当にみんな良い子達ばかりで仲が良く団結力もあり、なんといってもそれぞれが光る個性を持っていてこのクラスを担当できたことが本当に嬉しかったです。言葉足らずな私達の要望にもしっかり答えてくれたり、無茶なインプロや初めてのジャンルにも一生懸命取り組んでくれたりして最後までしっかりといってきてくれました。作品を創っていく過程で行き詰まったり、納得がいかず悩んだりしたので2人で話し合う時間をたくさん設けました。だからこそ、長く感じてあっという間な7分間にやりたいことを詰め込んで妥協のない作品ができ上がったのだと思います。そして、見た目にもこだわりました。衣装は1年生から集めた不要になった服などをリメイクして手作り し、髪型やメイクも個性的に仕上げました。

「A1で良かった!楽しい!」と思ってもらうようなSHOWCASE期間にしてあげることが目標だったので無事達成できたと感じております。私達が1年生に教えてあげられたことはごく僅かですが、学んだことを今後の学生生活に活かしてどんどん活躍していく姿を見られたら嬉しいです。

安保菜々子・近藤志歩(3年生)　SHOWCASE振付者(A2クラス)

たらこは鱈のこどもだからたらこなのか。蛙のこどもはおたまじゃくしだし、鶏のこどもはひよこなのに。「毎日が不思議で溢れ、ワクワクしっぱなしだったあの頃を忘れないでいて欲しい」という思いからこの作品を創りました。様々なバックグラウンドをもった18名と1つのモノを創り上げるというのは想像していたよりもずっと難しく、うまくいかないことも沢山ありました。楽しくもありしんどいと感じてしまうこともあったSHOWCASEでした。今思えばもっとこうできたのではないか、など色々思ったりもしますが、あの時にはあの時にしかないモノをみんなと創りあげられたのではないかなと思います。そのことがとても嬉しく、振付を経験できて良かったと思います。作品だけでなく、18人と一緒に過ごした日々がとても大切な思い出となっています。1年生振付を通して自分たちの行動に責任をもつことの大切さを改めて感じました。夏のSHOWCASEは、"これから"でいっぱいの1年生に向けたエールであり、私たちにとっても"これから"を広げる原動力となると確信しています。A2のみんな、ありがとうございました。

塩川ちひろ・竹田奈央(3年生)　SHOWCASE振付者(A3クラス)

1年生振付に志願することを決意した時、私たちは2人の中でいくつかの目標を作りました。「作品の制作過程で1年生が多くのことを吸収し、いろんなことに対して感性豊かに感じ取り、今度に活かすための経験をさせてあげること」、「今後に活かせる選択肢を増やすためのサポートをすること」、そして最後に「踊り的にも精神的にも彼女たちに寄り添い、良い作品を生み出すために一年生と共にサバイブすること」。

これらの目標が4月からの3ヵ月間で達成できたかどうか、A3の一人一人がちゃんと納得して作品に取り組めているか不安だったけれど、客席からみんなの「サバイブ」する姿を見た時、私たちの想いはしっかりと届いていたのだと感じました。舞台上で踊っている姿は、とても逞しく、一人一人がしっかりと意思を持った表情・目をしていて、その瞬間A3のみんなと共に作品を創ることができて本当に良かったと心の底から思いました。

3ヵ月間、どんどん成長していくみんなを見て、私たち2人も刺激を受け、成長することができたと思っています。これからもA3のみんなの成長を見続けていきたいです。

「SURVIVE」

『これからの人生の中でどんな困難が待ち受けていようと、逃げることなく、自分自身の意思を強く持ち、納得のいく道でサバイブしてほしい。』